

白藍塾オリジナル

2023年度 入試小論文分析&解答のヒント

2023年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・環境情報学部

今年度は、ここ数年の変則的な出題形式から、多数の資料を使った従来のパターンに戻っている。ただ、実質7つの設問に、総字数1800字という、かつてないボリュームの多さになっている。とくに今年度の課題は、すべての資料にちゃんと目を通した上でそれらの関連性を読み取ることも求められているので、時間内に終わらせるのは至難の業だ。

ただし、文献4と6を除いて、資料の多くは対談だったり、エッセー調だったり、設問にあるような「熟読」を必要とする内容とは言えない。例えば、設問6の設問文を見れば、文献1～3がどんな傾向の内容かは大まかにつかめると思うので、それを踏まえて飛ばし読みをするほうが、「熟読」するよりもむしろポイントを捉えやすいはずだ。

この中だと、設問3と5がやや難易度が高い。ただ、「定性的研究」というのが価値判断を排して対象をよく見る（観察する）ことであることがわかれば、それが文献3の筆者の言う「社会的価値」と結びつかない創作や、文献5の「生きることに向きあうための学問的態度」と通じ合うものであることもわかるはずだ。

最後の設問6のうち、(a)は「Bさん夫妻の住まいかた・暮らしかた」がどうなるかを考える問題。こういった立ち位置から考えるか判断の難しい問題だが、次の(b)の設問文を見るかぎり、文献1～3の示唆するような自然に沿った生活だけでなく、Bさん夫妻のような都市生活者がいわゆる田舎暮らしをする際にぶつかりやすい障害や困難も併せて想定するほうが、説得力のある内容になるだろう。

(b)は、その「Bさん夫妻の住まいかた・暮らしかた」を調査するためにAさんがどんな研究方法を工夫するかを考えることが求められている。

設問文から、文献4～6を踏まえて考えることが期待されていることがわかる。また、「(専門である室内環境だけでなく、)より広い視座や多様な着眼点からひとの住まいかた・暮らしかたを探

求する必要がある」という箇所も参考になる。となると、やはりBさん夫妻と頻繁に交流しつつ、夫妻の立場に寄り添いながら、夫妻の生活が周囲の環境や共同体との関わりの中でどのように変わっていくかを、長期間にわたって観測することが必要になるだろう。

そのための工夫はいろいろと考えられるが、受験生にそこまで高度な答えは求められていないので、以上のようなポイントがしっかりと押さえられていれば十分なはずだ。

* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室(03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>